

## ヴァイオリニスト TAIRIK の戯言

〔第 87 回〕

## 弦が揺れると、僕は季節の風になる

✦ 文 佐田大陸 text by Tairik Sada ✦

命を繋ぐ。心を繋ぐ。

日本の臓器移植の現状は、待機患者数が1万6098名に対し、臓器提供者はわずか53名(2023年3月31日、日本臓器移植ネットワーク発表)。たとえば2022年の心臓移植では、アメリカの4109例に比べ、日本は79例と圧倒的に少なく、ヨーロッパやアジアの他国と比較しても認知の低さが顕著です。

先日、東京大学内で行われた「NPO法人ハートtoハート・ジャパン」さん主催の臓器移植についての公開講座で演奏する機会をいただきました。ハートtoハートの理事長を務められるのは、「心臓外科のゴッドハンド」と呼ばれる南和友先生。演奏前に講義を拝聴し、副理事長が日本の心臓移植の現状と課題について話してくださいました。

講義では、ドナーになった家族を持つご遺族、移植手術を受けて今を生きる方、人工心臓を装着して移植を待つ方、それぞれの経験が語られました。中でも強く胸に響いたのは、当時11歳でドナーとなったお子さんを持つご両親のお話です。

心臓移植を受けるためドイツに渡った直後に亡くなったお子さんと交わ

した会話。「もし自分が提供される側ではなく、逆の立場だったらどうする？」と父親が聞くと、彼はこう答えたそうです。「提供してくれる人がいるから僕が生きられる。だから、僕がそういう状況になったら、使ってほしい」。

お子さんの最後の願いを受け止めたご両親は、20年経った今も日本の移植医療の普及活動に尽力されています。「提供された方に会いたいとも思わない。ただ、元気で幸せに生きてくれたらそれでいい」という言葉に、言葉にならない尊さを感じました。

現代の日本では、移植医療について知る機会がほとんどなく、大半の方が何も知らないまま生涯を終えています。それぞれの家族で議題に挙がるようになるとは、まだまだ課題が多いのが現状です。

音楽は直接的に人の命を救う医療とは異なりますが、心を癒やし、笑顔を守る力があると信じています。いつ人生の幕が引かれるかは神様しか知りません。

来る日のために、どういう生き方をしているのか——改めて考えさせられた一日でした。

## profile

TAIRIK(たいりく) ヴァイオリニスト / ヴィオリスト / 作曲家

桐朋学園大学音楽部卒業、同大学院修了

ヴァイオリン & ピアノによる3人組インスト・ユニット「TSUKEMEN」を結成後、キングレコードよりメジャーデビュー。最新アルバム「HAPPY キッチン」など、リリースしたCDはクラシック・チャート1位を次々と獲得。国内にとどまらず、アメリカ、アジア、ヨーロッパなどで700本を超える舞台に立ち、50万人以上の観客を魅了。近年ではTSUKEMENに加え、古澤巖氏と結成した弦楽四重奏団「品川カルテット」、水谷晃氏と結成した「MIZUTANI × TAIRIK」も大反響を呼んでいる。

「徹子の部屋」「題名のない音楽会」「きょうの料理 栗原はるみのキッチン日和」など数多くのTV番組に出演。SBCラジオ「TSUKEMEN TAIRIKの信 TAIRIK発見」毎週月曜 15:00 台にレギュラー出演中。

<https://tsukemen-music.com>

